



Title	フランス美学のエスプリ : その系譜と展望
Author(s)	上倉, 庸敬
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49117
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏	名	かみ 上	くら 倉	つね 庸	ゆき 敬
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)				
学 位 記 番 号	第 2 1 4 5 4 号				
学 位 授 与 年 月 日	平成 19 年 3 月 30 日				
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 2 項該当				
学 位 論 文 名	フランス美学のエスプリーその系譜と展望ー				
論 文 審 査 委 員	(主査)				
	教 授 大橋 良介				
	(副査)				
	教 授 柏木 隆雄	教 授 天野 文雄			

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、フランス近代美学とその流れをキリスト教美学という視点から組み立てなおす試みである。全 9 章に付論が 2 章、A4 判で 181 頁、400 字詰め原稿用紙に換算して約 700 枚から成っている。

序章では、フランス近代美学誕生に必要とされた「模倣」、「創造」、「理性」、「恩寵」といった諸概念が、ギリシャ・ラテンの古典古代から中世キリスト教の時代を経るうちに、どのように形成されていったか、またそれをフランスがどのように変貌させて、みずからの芸術観また美学にとりいれていったかが、分析され考察される。理性の力をあたうかぎり認めながらも、芸術の領域においては恩寵＝天分のはたらきを尊重したところに、フランス近代美学の出発点を見いだしている。後者はキリスト教を背景にしなければ考えられない。

第 1 章から第 4 章では、キリスト教美学というものがあろうか、ありえたとして、それがフランス近代美学でどのような役割を果たしてきたかが考察される。キリスト教という信仰と美学という哲学が結びつく可能性を探るために、論者は 20 世紀における新トマス主義いわゆるネオ・トミズムにおける美学ないし芸術哲学をとりあげる。ネオ・トミズムの成立にあたっては哲学以外の、たとえば当時、カトリック教会の置かれていた状況が、大きな要因となっているが、理性と信仰の連続性を主張するトマス・アクィナスの思想は哲学美学をきりひらく可能性があったと結論される。可能性があった以上、フランス美学史上にその痕跡をさぐることができるであろう。こうしてフランス古典主義の時代と世紀末象徴主義の時代における美意識が分析される。古典主義の時代にあつて、美の主観性および芸術の非合理性を主張する考えは、キリスト教美学の反映といえるであろうし、世紀末における芸術＝模倣説の完全な放棄と一体になった象徴の重視にも、そのことは指摘できる。しかしネオ・トミズムの美学をもってキリスト教美学とするには、あまりに限界が明白である。一方で、人間の知性から作品が外在化する論拠を証明できず、他方で、人間の活動全体のなかで芸術活動を位置づけることができない。一方で、人間の知性を肥大化してしまい、他方で人間のあり方を矮小化してしまう。

第 5 章から第 7 章では、主としてフランス近・現代の詩、文学、演劇、映画の個別作品をとりあげて、作品へと結実する芸術活動の必然性を明らかにし、そうした作品に見られる人間の生をまるごと抱えようとする意欲を指摘して、論者自身によるキリスト教美学が試みられる。解釈という作品受容にまでキリスト教美学を拡張した場合、キリスト教を血肉とする日本の劇作家の作品を、どのように理解できるかという試論を終章にすえている。

論文審査の結果の要旨

本論文の第一の収穫は、フランス美学の成立から現在にいたる流れのなかで、キリスト教の果たした役割を、哲学美学の視点から、精確に測定していることであろう。いまさらポスト構造主義の美学やら何とかの美学やらは聞き飽きているし、そのときどきの流行を追うにすぎない。もちろんキリスト教の影響などということも言い古された物言いはあろう。しかし、その当然のものを正面からとりあげる論攷は多くないどころか少ない、あるいは皆無であるに等しい。そうした大きな、むしろ大雑把な問題は、印象によりかかって語られるのみで、よく精密な考察対象とはならないからである。本論文はキリスト教美学の可能性自体から問いはじめ、ネオ・トミズムという学派を俎上に乗せて、厳格に対象を区切り、芸術という感性の領域で、キリスト教という信仰があたえた影響を、哲学の言葉によって描きだしている。

第二の収穫は、キリスト教の果たした役割が明確になったので、逆にギリシャ古典哲学が美学にもつ意義も判然としたことである。むしろギリシャ哲学はキリスト教の教義形成に分かちがたく絡み合っている。しかし、いまなお美学で用いられている諸概念がその源をどこまで遡れるかは、かなりな程度まで明らかになった。キリスト教を知らずに、つまりは古典哲学との関係を知らずに語られる西欧美学研究の、いかに多かったことか。本論文によって、これまでの美学研究は見直されざるを得まい。

第三の収穫は、論文後半で応用篇のようにして個別の芸術作品が論じられ、フランス古典主義をはじめ近代の芸術動向を俯瞰するにあたって、明快な操作概念をつくりあげていることである。たとえば美の主観性・客観性、また芸術の合理性・非合理性がそれぞれの時代にあって何を意味していたかは、キリスト教との関係、芸術状況を勘合すれば、はっきりと規定できるだろうと、少なくとも見通しを立てることができる。

論文の問題点も無いではない。全体としてキリスト教美学を中軸とするが、アリストテレスからトマスへというトミズムが中心であり、プラトンからアウグスティヌスへというもうひとつの系譜への言及が手薄である。また、叙述が西洋精神史の全体にわたるため、叙述に精粗の差がかなり目立つ。デカルトやパスカルへの言及の少なさは、特に気になるところである。また、長年の研究の集大成の反面であろうが、初期の頃の論文と最近のそれとでは、文体がかなり異なってきて、不統一の感を否めない。

とはいえ、本論文の成果はそれによって左右されることはなく、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。